ポケモンヒストリー

名無し

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモンヒストリー

【Ｎコード】
Ｎ６６４５Ｚ

【作者名】
名無し

【あらすじ】
さまざまな地方を巡り歩いてきたサトシは、
その実力を買われ、なんとカントー最強のトレーナー・ワタルへの挑戦権を得る！しかし、世界は広かった……。
もっと強くなりたいと闘志を燃やすサトシは、初心に戻るため再び各地方への旅を開始する！
熱いバトル、さまざな陰謀、そして恋……。
はたして、彼に待ち受けるものとは！？

キャラ紹介

サトシ　１７歳
「気合い」と「根性」でできた若きポケモントレーナー。相棒はずっとピカチュウ。そして夢もずっとポケモンマスター。
そんな彼も成長し、トレーナーとしての実力は今やカントーでは1、2を争う程に。しかし、調子に乗りやすい所や無鉄砲さなどは変わらず、精神面の成長はあまり見られない……と思いきや、可愛い女の子を前にするとたま～に赤面することも。でも周りと比べるとやはりまだまだ鈍感。

ハルカ　１７歳
「ホウエンの舞姫」の二つ名を持つ。コーディネーターとしての実力はもはやトップクラス。
当然外見も成長し、だんだん「可愛い」から「綺麗」になってきた。何とファンクラブまでできたとか。内面的にもすっかり大人……
……になった訳ではなく、同年代のヒカリや弟のマサトにまでいいようにからかわれるなど、「大人の女性」までの道のりはまだまだ遠い（笑）。
最近はコンテストどころか、周りを完全シャットアウトして猛特訓しているらしい。

タケシ　２１歳
ポケモンブリーダーにしてニビシティジムリーダー。その幅広い知識でサトシ達をかげながら支える。皆のお兄さん的存在。しかし「

お姉さああああん！！！」なのは今でも変わらない……。

カスミ　１９歳
自称「世界の美少女水ポケモンマスター（長っ）」。水ポケモンをこよなく愛するハナダシティジムリーダー。軽そうなイメージとは裏腹にジムリーダーとしては誰もが一目置く存在。
サトシだけでなく、ハルカやヒカリにもよく相談を受けるなど皆に頼られている。タケシがお兄さんなら、彼女は皆のお姉さん役と言ったところ（？）

マサト　１４歳
ハルカの実弟。相変わらず生意気だが、彼ももう立派なトレーナーに。尊敬する父の様なジムリーダーになるべく、今は修行のため各地方へ旅に出ている。
姉であるハルカのことは気にかけていない様に見せてても実はお姉ちゃん子だったり（多分）。

ヒカリ　１７歳
今をときめく「シンオウの妖精」。その人気はもはやアイドル並。
同じコーディネーターであるハルカのことは良き友人兼好敵手として今でも慕っている。
超おしゃれ好きで人懐こく、今で言う「守ってやりてぇ」タイプ。
でもカスミと一緒にサトシやハルカをからかうなど、以外と人を扱うのが上手いところも（良い意味でだよ？）。

同じくライバルであるノゾミと共にトップコーディネーターを目指し精進中。

キャラ紹介（後書き）

若干アニメと設定が違うかもしれません。ご了承を……。

旅立ちと始まり（前書き）

作者はサトハル、シュウハルがすきです。
苦手な方はご注意を。

旅立ちと始まり

夜……
とある地方のとある街の高いビル……

？？？「……」

その屋上から街を見下ろす人物が一人……
黒いローブを纏い、表情も頭からすっぽりかぶったフードで見えない。
まさしく……漆黒……
夜空に浮かぶ月の光が無ければ、その姿は夜の闇に完全に紛れていただろう……

？？？「……」

バタバタ……
夜風がローブを撫でる……
その漆黒の人物はただただ、摩天楼の上から眼下に広がる街を見下ろしていた……

サトシ「じゃ、行ってきます！」
ハナコ「まったく忙しないわね……。もう少しゆっくりしていけばいいのに……」
サトシ「そんなじっとしてらんないよ！俺はもっと……もっと強くなるんだ！！」
ピカチュウ「ピカチュウッ！！」

帽子の少年……サトシの肩に乗るピカチュウが「同じく！！」と言わんばかりに鳴く。

ハナコ「ホント、あんたはソレばっかりね……」
サトシ「何だよ母さん。もっと明るく見送ってくれよ……。愛しい息子の決意の朝なんだぜ？」

サトシが少し冗談気味に言う。
マサラタウンの一般家庭のごく普通の光景。

ハナコ「ハイハイ。じゃあ、気をつけていってらっしゃい。身体は大事にね？」
サトシ「おう！行ってきま～す！」

遠ざかっていく息子の背中を見る……もう何度こうやって送ったことか……
でももうあの子も17……ずいぶんたくましくなったわね……
ハナコはその背中が点に見えるほど小さくなるまで見つめ、やがて家に入っていった。

サトシ「う～ん。ちょっと早すぎたかなぁ……」
ピカチュウ「ピカ～……」

ハナダシティの駅の西口。
サトシはある人物達と待ち合わせしていた。
時計を見る。待ち合わせ時間１５分前。サトシにしては早い。
しっかし変わったなぁハナダシティも……
いわゆる高層化。もともとそんなに田舎町というわけではなかったが、１０歳のころ自分が初めて訪れた時と比べれば、高層ビルやらなにやらが多くなっていた。

サトシ「この駅も昔は小さ……あっ！お～いカスミぃ～！！」

向こうからオレンジ色の髪の少女が歩いてくる。

カスミ「ちょっと！そんな大きな声出さないでよ！恥ずかしいじゃない！」
サトシ「いやだって、こんな広いとここれくらいじゃなきゃ聞こえないだろ？……いやぁ～でも久しぶりだなぁカスミ！ちょっとは女らしくなったんじゃね？」
カスミ「へぇ～？あんたも少しは成長したじゃない。このアタシの魅力にちょっとは気がついたなんて。」
サトシ「まぁ、だって元がアレじゃあさ……ってウソウソ、ジョーダン……ソレ当たったら怪我……」

カスミが近くの小石を拾おうとしたので、サトシは続きを言うのをやめた。

カスミ「ったく……ん？あれタケシじゃない？」
サトシ「あ、ホントだ！お～いタケシィィ！！こっちだこっち～！！」
タケシ「おお二人とも！久しぶりだなぁ！」

細目の男。タケシの登場だ。

サトシ「久しぶりだなタケシ！どうだ？彼女できたか？」

冗談気味に言うサトシ……が

タケシ「サ、サササササトシが……彼女って……言った……！？」
サトシ「何だよ～、そんなびっくりすんなよ～！冗談だって！」
タケシ「サトシからその部類の冗談が出るとはな……。この六年あまりの月日は伊達じゃないってことか……」
カスミ「アタシもちょ～っとだけビックリしたわ。でも行動が突飛なとこは変わりないわね……」
タケシ「だな。いきなり「初心に戻りたいから最初のメンバーで旅しよう」だなんて……。まったく人のこと考えてるのかよ。」
サトシ「ハハハ。でも二人とも来てくれたじゃん。やっぱ仲間だよなぁ～俺たち！」

サトシは数日前、かのカントー最強のトレーナー、ドラゴン使いのワタルとバトルした。
何故そんな変則マッチが実現したかと言うと、
カントーリーグ協会がサトシの有望性を買い、何とポケモンリーグ、四天王リーグともにすっ飛ばし、特別にワタルへの挑戦権を与えたのだった。
だが結果は……完敗。

何とか三体を戦闘不能に追い込んだものの……、最後はワタルのカイリュー相手に手も足も出ず、ストレート負け。
その圧倒的な力の差にサトシは唖然としたが、

ワタル「君の再挑戦を心から待っている……」

その言葉でサトシは吹っ切れた。
……世界は広い……俺はまだまだ強くなれる……
……！！
というわけで初心に戻り、一番最初に旅をしたメンバーで旅をしようというのだ。

サトシ「まっ！回るのはカントーだけだからさ！それまでの間つきあってくれよ！」
ピカチュウ「ピッカチュウ～！」

ピカチュウが「ごめんね～」と言わんばかりに可愛らしく鳴く。

カスミ「しょうがないわね。可愛いピカチュウに免じて、つきあってやるわ！」
タケシ「まぁ俺たちにとっても、ためになるかもしれないしな。ブリーダー修行の旅、再開だ！」
サトシ「そうこなくちゃ！よろしくな二人とも！！」

バンバン！と二人の肩を叩くサトシ。

カスミ「っタ！もうちょっと加減しなさいよ～！……で、カントー回った後はどうすんの？」
サトシ「う～ん、まだ決めてない。ホウエンにでも行ってみようかなぁ～……」

カスミ「あら？ジョウトすっ飛ばしてホウエンなんて……喜ぶわよ～？愛しのハルカァ～。」

さっきの仕返しと言わんばかりにカスミが冗談気味に言う。

サトシ「いっ、愛しっ……！ちげーーーよ！！別に会いに行くだけで旅に誘おうとしてた訳じゃ……」
カスミ「ほぉ～う、会いに行くつもりだったんだぁ～。」
サトシ「だ、だから違っ……！ちょっと世話になったから顔出しとこうと思っただけだって！！」
カスミ「そーやって必死になってんのが怪しいのよ。ってか顔真っ赤よぉ～？」

サトシはもうしどろもどろ。
でもこーいう冗談が通じる様になったんだからすごい成長よね。

サトシ「ッッッッ！ああ～もうっ！さっさと行くぞ！？」

ズカズカと進んで行くサトシ。

カスミ「ちょっ、行くってどこ行くのよ！」
タケシ「逃げたか。」
カスミ「も～、面白かったのにぃ……。」
タケシ「……そういうお前はどうなんだ？」

と今度は、タケシがカスミ同様、にやけながら言う……
……が

カスミ「フフフ。ヒ・ミ・ツ！」
タケシ「なっ……何ぃ！？」

思いがけないカスミの返答に驚くタケシ。
じょ、冗談のつもりで言ったのに……

カスミ「ハーイハイ、この話はここまで。さっ、サトシ追いかけましょ？このままじゃアイツ迷子になるから。」

そう言ってサトシを追いかけるカスミ。
タケシはそんな彼女の背を見る……

タケシ「……こりゃ、俺たちもうかうかしてられないな。サトシよ。」

静かに呟くタケシであった。

カントー地方。どこかの街のビルの地下……

？？？「……状況は？」

低い。地獄の底から響いてくるかの様な声。

部下？「はっ！先程、監視の者から入った連絡によりますと、ター

ゲットは今朝マサラタウンを出発。現在はハナダシティ駅にてトレーナーと思われる仲間二名と合流したとの事です！」

部下と思われる男が軍隊じみた口調で報告を上げる。

???「仲間というのは？」

部下１「はっ！ニビシティジムリーダー・タケシ、ハナダシティジムリーダー・カスミと思われます！」

???「なるほど。昔のメンツと言うわけか……。監視を続けろ。動くのは奴らに隙ができた時だ。その際、他の者は適当に追っ払っておけ。目的はあくまでサトシ君のみだからな。」

部下１「はっ！では引き続き監視の伝令を送ります！」

???「よし。お前はもう下がれ。次の報告を。」

するともう一人の部下が前へ出て、先程の部下と同様に軍隊口調で、

部下２「はっ！解析は現在３５％完了。このペースでいきますと１０日後には完了する予定です。」

???「思ったよりかかっているな。急げ。」

部下２「はっ！すぐに伝令を！」

バタン……部下達が扉を閉める音……

もう部屋にはボスと思われる男一人しかいない。

……少し手間取ったものの、こちらは近い内にメドがつくだろう……

……後は……

???「……『ワダツミ』……か……」

数日後……町外れの芝生……

タケシ「ブースター、戦闘不能！よって勝者、サトシ！」
サトシ「いよっしゃあああ！！大勝利だぜえええええ！！」
カスミ「っっっっうっさいわね～……」

カントーを回り始めて数日。
サトシはカスミ、タケシと共に相変わらずバトルの日々を送っていた。
そして今日の草試合も見事勝利をおさめた。

トレーナー「ちぇ。やっぱ強いなサトシさんは。」

試合相手の少年がブースターをボールに戻しながら言う。

サトシ「いやぁ、俺なんてまだまださ。ワタルさんのカイリューに軽くあしらわれちゃったし。」
トレーナー「でもあのワタルさん相手にあそこまで戦えたんだ。十分強いよ。」
サトシ「そう？ま、まぁ悪い気はしねぇなぁ～、ハハハ！」
カスミ「すぐ調子乗んだから……」

サトシとワタルの変則マッチの模様は全国にＴＶ中継されていたので、多くの人がその戦いを見ていた。

同時にサトシの名も自動的に広まって、今ではちょっとした有名人だ。

タケシ「そろそろポケモンセンターに行った方が良いだろう。ポケモン達も疲れてる。」
サトシ「ああ、そうだな。」

タマムシシティに着いたサトシ達はまっすぐポケモンセンターへ直行、ポケモン達をあずけた。

タケシ「ジョーーーーイさあああっ……あでっ！でででで！？」
カスミ「アンタは変わってないわよねほんっっっっと！」

すぐにカスミに耳を引っ張られるタケシ……

タケシ「ちょっ……まだ名前呼んだだけっ……！」

懐かしいなぁ……
などとサトシは呆れながらそれを見ていたが、

ジョーイ「マサラタウンのサトシさん。フタバタウンのヒカリさんから伝言を預かっています。ソノオタウンのポケモンセンターに連絡が欲しいそうです。」
サトシ「ヒカリが？はい。わかりました。」
カスミ「ヒカリ？前にシンオウを一緒に旅してたっていう子？」

またもやカスミがニヤニヤしながら言う。

サトシ「ま～たそれだよ……。ヒカリは友達！仲間だよ！」
カスミ「じゃあハルカは？」

サトシ「ハルカも同じだ！！と、とにかく、ヒカリに電話しないと……」

そう言ってＴＶ電話のもとへ向かうサトシ。

カスミ「ふぅ～ん……（ニヤリ）」

カスミは見逃さなかった。
ハルカの事を聞かれた時と、ヒカリの事を聞かれた時の、サトシの微妙な反応の差を……

旅立ちと始まり（後書き）

初めての投稿です！
どこまでやれるかわかりませんが頑張ります。

嵐の前の静けさ？

タマムシシティ・ポケモンセンター。
午後５時。

サトシ「よぉヒカリ！久しぶりだなぁ！」
ヒカリ「サトシ久しぶり～！元気してた？」

サトシはジョーイからの伝言を受け、ＴＶ電話でヒカリに電話していた。

ヒカリ「タケシも久しぶりね！……あ！もしかしてあなたがカスミさん！？わたしヒカリです！よろしくね！」
カスミ「よ、よろしく！」

ヒカリの勢いに珍しくカスミは押され気味だ。

ヒカリ「でもカスミさんって噂どおり美人ねぇ～！しかもジムリーダーだなんて！女として憧れちゃう！」

その言葉にカスミはもうニヤニヤ。

カスミ「そ、それほどでもぉ～！ヒカリっていい子じゃなぁいサトシィ～！」
サトシ「すぐ調子乗るのはどっちだよ……」
カスミ「何か言った？」
サトシ「や、何も～。ところでヒカリ、俺に何か用か？」

サトシは今の空気が面倒くさいのでさっさと本題に入った。

ヒカリ「あ！そうそう！最近ハルカと連絡取れないんだけど、サトシ何か知ってる？」
サトシ「え？ハルカ？いや、特に何も聞いてないけど……えっ、連絡つかないのか？」
ヒカリ「そうなのよ。私が連絡したのは三日前くらいなんだけど、それからいくら電話かけても出ないのよ。」
サトシ「ふ～ん……。カスミ何か聞いてるか？」
カスミ「いいえ、別に何も聞いてないけど……」
サトシ「タケシは？」
タケシ「いや、俺も別に……」
サトシ「……まっ、あいつのことだ。ケータイの電源消しっぱとかなんじゃねぇの？それかどっかに落としてるとか。」
カスミ「サトシの中のハルカはよっぽどドジなイメージのね……」
ヒカリ「そっか……。わかったわ。とりあえずまた連絡してみる。突然ごめんね。」

ハルカを心配してか、さっきまでの勢いがすっかり無くなってしまったヒカリ。
さすがにサトシもすぐにフォローする。

サトシ「ま、まぁそんな心配すんなって。後で俺がマサトあたりに電話して聞いてみるから。」
ヒカリ「ホント！？ありがとうサトシ！わたし、よく考えてみたらハルカの身内の番号知らないから……。でも良かったわ！何かわかったら教えてね！」
サトシ「ああ、すぐ連絡するよ。」

パァ……と、突然明るくなるヒカリ。
ホント表情豊かだよなヒカリは……

お前は笑顔が一番……って！何考えてんだ俺！？
ともあれとりあえず元気になったヒカリを見て安心したサトシは、しばらく雑談を楽しんだ。

ピッ……ＴＶ電話の電源を切る。

ヒカリ「…ふぅ……」
ノゾミ「どうだった？」
ヒカリ「うん……。サトシ達も何も聞いてないって……。」
ノゾミ「そう……。」

さっき電話では元気に話していたものの、ヒカリはやはりハルカが心配だった。話している間は気がまぎれていたのだろう。

ノゾミ「どうしたんだろうね？最近コンテストにも全然出てないみたいだし……。」
ヒカリ「うん……。」

ハルカが最近コンテストに出ていない事は、サトシには言わなかった。
そこまでは……何だか言いづらかったからだ。
……わたし……ミクリカップ以来、ハルカに一度も勝ったことないのに……
でも……ハルカがいなくなれば……楽になる……？
前に見たコーディネーターの雑誌にそんな事が書いてあった。
「ホウエンの舞姫、戦線離脱！？シンオウの妖精、障害が無くなり一歩リードか！？」

勝手なこと書かないでよ……
だからこそ……越えたいのに……
ノゾミ「ハルカにミクリカップのリベンジしたいんだけどな……」
ヒカリ「うん……」
……でも、大丈夫だよね。サトシもマサト君に聞いてくれるって言ってたし。きっと何か事情があるんだよね。
ヒカリは無理やり気分を切り替えた。
ヒカリ「ハルカなら大丈夫！きっと何か事情があるのよ！」
ノゾミはいきなりヒカリの勢いが戻ったので多少びっくりしたが、すぐに不敵に笑い返した。
ノゾミ「そうだね。それにいつまでも引きずってたら、明日のコンテストにも影響が出る。」
ヒカリ「うん！明日こそ負けないからねノゾミ！」
ノゾミ「その息だよヒカリ。でもまさかアンタに励まされるなんてねぇ。」
ヒカリ「ちょっとソレどういう意味よ！？」
ソノオタウンのポケモンセンターに、二人の元気な声が響いた。

午後９時３０分。
タマムシシティ・タマムシ美術館
美術館付近……

？？？「目標に到達。指示を。」

ピピガガッ……通信機器の音……

？？？「よし、では各管理コンピューターにハッキング。完了次第報告せよ。」
？？？「了解。では、ハッキングを開始します。」

ガチャガチャと色んな機器をリュックから取り出す。と同時に、ものすごいスピードでそれらを操作し始める。
風もない静かな夜……嵐の前の静けさというものだろうか……

サトシ「修行？」
マサト「うん。３ヶ月くらい前だったかな？「自分とポケモンの力を高めるために修行するから、しばらく連絡取れなくなる」っていきなり電話きてさ。まぁサトシがよくやる山籠もりみたいなもんなのかな？」
サトシ「にしてもずいぶん長いな……」

サトシはさっきヒカリに言った通り、ハルカの事を聞くためマサトに連絡していた。
マサトは今はポケモントレーナーとして各地方をまわっており、今はジョウトにいるらしい。

マサト「それでしばらくコンテストにも出れないって言ってたけど、まぁそういう事だから。うちの姉が心配かけたねぇ。」

相変わらず皮肉いっぱいにマサトは言う。

サトシ「ハハハ。まぁ別にそんな心配はしてなかったけどな！」
マサト「あらら、お姉ちゃんかわいそうにぃ～……」

マサトは何やらニヤニヤしている。

サトシ「ま、まぁちょっとは心配したかなぁ～、ハハ……。じゃあありがとなマサト！ジム戦がんばれよ！」

と言いつつ内心では結構心配してたサトシ。
これでひとまず安心だな。

マサト「うん！サトシになんてすぐ追いつくからね！」
サトシ「ったく成長しても生意気ィ～…。じゃなっ！」

ピッ！携帯の電源を切る。

タケシ「何かわかったか？」
サトシ「ああ、何か修行だってさ。」
カスミ「修行？」

サトシはさっきマサトから聞いた事をタケシ達にも話した。

タケシ「コンテストにも出ないで特訓だなんて……随分な力の入れようだな……。」

カスミ「しかも完全にまわりシャットアウトして3ヶ月も……。どっかの誰かさんに似て行動が突飛ね～。」

カスミがサトシを横目で見ながらわざとらしく言う。

サトシ「おいソレ俺に言ってんのか？」

カスミ「他に誰がいんのよ。」

カスミの即答にふてくされた様な顔をするサトシ……が……へっ。いっちょ前に張り切りやがって……

サトシ「っっおーーーし！！俺も負けてらんねえええええ！！ちょっと外行ってくる！」

カスミ「えっ！？外って何、ドコ！？」

サトシ「修行だよ修行！大丈夫すぐ帰ってくるから！じゃなっ！」

そう言ってサトシはポケモンセンターから飛び出して行ってしまった……。

カスミ「ちょっと……！ヒカリに連絡するんじゃ……も～行っちゃったし……。」

タケシ「ハハハ……。まぁヒカリには俺達で連絡しておこう。」

カスミ「そうね。……にしてもホンッット似た者同士……。」

夜のタマムシシティに消えていった少年の背中にため息をつくカス

ミであった……。

午前1時
タマムシシティ……どこかのビルの屋上……

？？？「……」

月も星も雲により身を潜めた夜の闇は、やはり漆黒のローブを纏ったその姿を完全に呑み込んでいた……
眼下に見下ろすはタマムシ美術館。
そして……

サトシ「ふぅ〜。けっこー遅くなっちまったなぁ。散歩がてらそろそろ帰るかピカチュウ」
ピカチュウ「ピッカッチュウ！」

肩に黄色いポケモンを乗せて歩く少年……

？？？「……」

闇に紛れた「闇」は、ただただその少年を見つめていた……
……

タマムシ美術館付近。

???「ハッキング及び突入準備完了。いつでもいけます。」
???「……よし、ここからもよく見える。」

先ほど出されていた電子機器の数々はすでに片付けられている。

???「では作戦及び目標の再確認を……」
???「リーダー。それは必要ありません。時間の無駄です。」

リーダーと呼ばれた男の言葉を遮り、同時に上司に対しては有り得ないであろう言葉を放つ……が

リーダー?「フッ……そうだったな。お前は何よりも無駄を嫌うエージェント。そして……」

？？？「どんな任務も無駄なく達成してみせます。」

またもやリーダーの言葉を遮る。

リーダー？「頼もしいな。では、コードネーム　『ルカ』……

……」

瞬間、雲が割れ、月光がさす。

リーダー？「……突入せよ。」

ルカ「了解。」

ピッ……

リーダー？「ボス、『ルカ』が目標に突入しました。」

？？？「そうか。ご苦労。お前はもう戻れ。」

リーダー？「はっ。」

どこかの街のどこかの地下……

現在は部下もおらず、部屋にいるのは「ボス」と呼ばれた彼一人だ。

……『ルカ』に任せておけば、まず間違いなくアレは手に入るだろう……

残る鍵は……

？？？「……『シド』。」
シド「はっ。」
？？？「『水の民』の捜索を開始しろ。」
シド「はっ。ただちに。」

ピッ……通信機器を切る。
ガサッ……机にあった古い文献を手に取る。
そこに描かれているのは、
「龍」を思わせる体躯をした生物。

？？？「……必ず……手に入れる……」

思わず声に出る。それほどまでに手中に収めたい存在。
コンコン。ドアをノックする音……

？？？「入れ。」

ガチャ……ドアが開く。

部下「失礼します。個体０２に関する解析について報告いたします。」

男の表情が、期待のソレに変わる。

？？？「……聞こう。」

部下「……解析は１００％完了。いつでも適合実験に移行可能です。」
？？？「……そうか。」

男の表情が、不敵な笑みに変わる。
???「ただちに開始しろ。」
部下「はっ！」
部下が立ち去ろうとする……が
???「お前はどう思う。私がこの力を手に入れたとき、私はどのような存在になっていると思う。」
突然の言葉に多少戸惑った部下だったが、すぐに表情を戻し答えた。
部下「……神……に等しい存在に。」
男の表情が、凶悪な笑みに変わる。
バタン……ドアが閉まる音。
今度こそ部下が出て行き、再び部屋には男一人となった。
だが……その笑みはいまだ浮かべたまま……
もうすぐ……もうすぐだ……
主人の周りの空気が激変したのに気づき、傍らのペルシアンが顔を上げる。
どこかのマフィアのボスのような出で立ち。
その主人の左胸には「R」のバッジ。
そして、もはや狂気とも言える表情で、言い放つ。
サカキ「……私は……神となる……！！」

嵐の前の静けさ？（後書き）

サトハル出てくるの結構後になるかも……
けど、必ず出しますんで！

遭遇！バカにされた？

サトシ「ふぁ～…、流石に眠くなってきたな……。」

夜もふけてきたので、サトシはバトルの訓練を切り上げ、ついでに散歩をしながらポケモンセンターへ向かっていた。

サトシ「今何時……げっ、もう1時回ってんじゃん。やりすぎた……。」

流石にこの時間だと肌寒い。散歩をやめ、サトシは身震いしながらポケモンセンターに急ぐ。

サトシ（そういやアイツ……一人で修行してるんだっけ。今頃何やってんのかな……って、もう流石に寝てるか。）

歩きながら空を見てみる。月も星も見えない。

……いきなり一人でジョウトに行くって言い出した時は、正直びっくりしたな……。

あの頃は俺だってまだ一人旅なんてしたことなかったのに……

……しかもアイツ女の子だし。ちょっと焦ったっけなぁ～……。

などと考えて歩いている内に大きなタマムシ美術館が見えてきた。

サトシ「美術館か。昔の俺ならあんま気にかけなかっただろうけど……、明日にでも寄ってみるかな？」

美術館の前を通りすぎる……と思ったのだが、

サトシ「……ん？」

ふと見ると、夜の美術館に入口から人が一人入っていくのが見えた。
こんな時間に……てか、まだ開いてたのか美術館。
好奇心には勝てず、ついさっきまでポケモンセンターへ向かってい
たはずの彼の足は、自然と美術館に向かっていた。

サトシ「……流石に夜中なだけあってちょいと不気味だな……
……」

ホールを見渡す。
シン……と静まり返り、人っ子一人いない。

サトシ「夜の美術館って結構定番のシチュエーションだよな。」

ちょっと肝試し気分で歩を進める。
カツーーーン……コツーーーン……
聞こえるのは自分の足音のみ。
よくわからない絵やら銅像やら、ポケモンの化石みたいのやらが沢
山展示してある。
てかこれって不法侵入？いや、だって入口開いてたし……誰
にも見つかってないし……大丈夫だよな？
全然ダイジョバナイのだが、残念ながら彼の常識の中では大丈夫ら
しい。
しかし、そんなサトシはふと疑問に思った。

サトシ「……誰にも……見つかってない？」

いや……見つける側の人がいない？
ここまで割と色んな場所に行ったが、それまでの間人という人を見

ていない。

サトシ「警備員とかいないのか……？いや、そんなことないよな……」

そういや入り口にも見張りとかいなかったな……見たといったらさっき入口から入っていった人……

サトシ「……！」

そこまで考えてやっと思い至った。

まさか……！？

そう思った瞬間、彼の視界に人影らしきものが入った。ただし……

サトシ「なっ……だ、大丈夫ですか！？」

部屋の隅に、警備員らしき人物が倒れていた。

呼んでもゆすっても反応がない。気絶しているようだ。

サトシ「くっ……！とりあえず救急車と警察を……」

今が異常事態であることに気づいたサトシは自分の携帯に手を伸ばす……が

サトシ「……何で！？何でつながらないんだよ！？」

焦りとイラつきで思わず叫ぶ。何故か携帯がつながらない。

ちくしょう……！だから誰もいなかったのかよ！？

恐らくいなかったのではなく、見なかった。ここにいる警備員と同じく、皆気絶させられ、どこかへおいやられているのだ。
この分だと、監視カメラなどの警備システムも全く機能してないだろう……

サトシ「人を呼びに行くか……！？でも……その間に逃げられちまうかも……」

焦りだけがつのる……が、
ふと、奥の曲がり角から人影が出てきたのが見えた。

サトシ「あ……待てっ！！！」

ほぼ反射的に体が動いた。向こうの人影もサトシに気づいたらしく、走り出した。
間違いない……泥棒だ！
ダダダダダダ！！と、夜の美術館を走り回る。
身体能力には自信があったサトシだが、向こうも相当らしい。かなり早く、隙をついて死角に回り込まれてしまう。

サトシ「くっ……こうなったら！ピカチュウ！アイツに１０万……はマズいか。でんじはだ！！」
ピカチュウ「ピカ～チュウッ！！」

ビシイ！！と、夜の美術館に雷電が迸る……が
？？？「……！」

ヒョイッ
なんと犯人は、かなり速度があるはずの攻撃を、意図もたやすくか

わしてみせた。

サトシ「なっ……！？」

何だアイツ！？あんなの俺でも難しいっての！

と負けず嫌いの彼は思ってしまう。普通はできないと思うんだけどなぁ……。

サトシ「っくしょ～！こうなったら挟み撃ち作戦だ！ピカチュウ！こうそくいどうで前に回り込め！！」

ピカチュウ「ピッカァ！！」

ビュンッ！！と、凄まじいスピードで前へ突っ込むピカチュウ。

？？？「……！」

ピカチュウがヤツを追い抜く！

そう思った瞬間、

ドカァッ！！と、ピカチュウが不意に何者かに吹き飛ばされる。

サトシ「ピカチュウ！？」

何とかピカチュウをキャッチするサトシ。幸い大したダメージではないらしく、すぐに地面に飛び降りる。

サトシ「ってアイツは！？」

慌てて周りを見渡すも、すでに犯人の姿はなかった。

サトシ「くそっ……！逃がしたか！？」

ルカ（何故人が中に……！？）

美術館・資料展示室奥。
そこでは先程の犯人……ルカが何か手元の機器を操っている。
まぁいい。任務には大して支障はない……
カタカタカタカ……ピピッ！……カチャッ……
どうやら保管ケースのロックを解除したようだ。
ギィ……ケースを開け、中の物を取る。

ルカ（……こんな物が……神に近づく鍵になるとはな……）

ソレをポーチにしまい込み、部屋を出ようと振り返った瞬間、

サトシ「見つけたぞ！！」
ルカ「……」

息を切らしながら、先ほどの少年と黄色いポケモンが入口に立っていた。

サトシ「そのポーチを渡せ！」
ルカ「……」

何も言わない犯人……
ん？よく見たらコイツ……女か？
後ろで一つに束ねてある深い茶色の髪。
身体のラインがくっきり解る、ピチッっとした黒い特殊スーツ（？）みたいなのに身を包んでいる。ほら……キャッ〇アイみたいなあの……
等と考えていると……
クルッと、ルカが後ろの窓の方へ向く！
その瞬間！
ビシイ！！と、窓が凍りつく。

ルカ「……！」
サトシ「っへ！お前の魂胆なんて見え見えだぜ。窓から逃げようとしたら冷凍ビームで凍らせろって、前もって指示を出しといたのさ！」

そう自信満々に叫ぶ少年の傍らにはオニゴーリが君臨している。

サトシ「さぁ、もう逃げ場はないぞ泥棒！」

他に窓も無く、出口もひとつしかない。確かに逃げ場はなさそうだ。
だが、

ルカ「……私が他に手をうってないと思うか？」
サトシ「え？」

瞬間、

ピカチュウ「ピカピ！！」

バシィッ！！

サトシ「うわっ！？」

間一髪、ピカチュウが後ろの気配に気づき、サトシに攻撃を加えられる前にアイアンテールで遮った。

マニューラ「……ニュ……！」

サトシ「マニューラ！？……って、あっ……！？」

だがその一瞬の隙をついて、ルカがサトシとピカチュウとオニゴーリの間を縫うようにすり抜けていった。

サトシ「しま……！待てっ！！！」

必死に追うも、既に犯人は入口の手前まで迫っていた。

なんて速さだ……

ルカが美術館の外へ出る。

が、

？？？「そこまでだ！！」

突然、サトシの聞き慣れた声が響いた。入口の方を見てみる。

ルカ「な……！？」

タケシ「サトシ！大丈夫か！？」

カスミ「ったく、なかなか帰ってこないと思ったら……やっぱ面倒に巻き込まれてんじゃない！」

ジュンサー「それを返しなさい！あなたを現行犯で逮捕します！」
そこにはタケシ、カスミ、そしてジュンサーら数人が立ちふさがっていた。
ジュンサー「包囲！！」
ズカズカズカ！！
一瞬で数人の警官が犯人の周りを固めた。
ルカ「ぐ……！？」
サトシ「な……何で……？」
一人だけ状況が掴めないサトシ。するとカスミがため息をはきながら説明を始めた。
カスミ「アンタがいつまでたっても帰ってこないから、心配になってアタシ達が探しに行ったら、美術館で倒れてる人を見つけたのよ。んで、ただ事じゃないと思って通報したの。」
サトシ「で、でも携帯繋がらなかったのに……」
タケシ「確かに美術館の近くでは繋がらなかったが、少し離れれば問題なく通じたんだよ。」
ジュンサー「恐らく何らかの方法を使って、美術館付近にのみ妨害電波を張ったんでしょうね。周りに怪しまれないように。おまけに美術館の警備システムも全てハッキングされパー……。サトシ君が引っ掻き回してくれなかったらきっと取り逃がしてたわ。」
サトシはポカーンとする。
ま、まぁとりあえず……結果オーライってやつ？

ルカ「く……！」
ジュンサー「確保っ！！」
警官達が一斉にルカに飛びかかる！
その瞬間！

ゴォ！！！と、
辺りが一瞬で炎に包まれる。

ルカ「！！？」
サトシ「っっっっ！！？」
ジュンサー「キャッ……！？」

炎が沈み、サトシ達の視界が回復する……が、
そこにはもう既にルカの姿はなかった……

ジュンサー「くっ！逃げられ……！？」

そして、その代わりに……

？？？「……」

バタバタ……黒いローブがはためく……

サトシ「……え…！？」
カスミ「だ……誰！？」

後ろから射し込む満月の光が、そのシルエットをかろうじて浮かび
上がらせる……
いつの間にか目の前の美術館の屋根の上には、漆黒の人物とポケモ

ンが立っていた……

タケシ「敵の新手か……！！にしても……！」

タケシは謎の人物の傍らに立つポケモンに目をやる。

ポケモン「……」

既にブリーダーとしてはトップクラスの実力を持つタケシ。
だからこそ、わかる。
……あのポケモン……かなり育てられている……！！
バックから射し込む月光のおかげでどのポケモンかまでは見分けられなかったが、発せられる雰囲気というか、気配といったものがそれを物語っていた。

ジュンサー「もしものために保険を掛けてたってわけね……！こうなったらあなただけでも公務執行妨害で逮捕します！ウインディ！！」
ウインディ「ガウ！！」
サトシ「ピカチュウ！お前も行け！！」
カスミ「行きなさい！マイステディ！」
タケシ「グレッグル！！」

ウインディ、ピカチュウ、スターミー、グレッグルが突撃する。
だが、

？？？『炎の渦。』

機械じみた、低い声が静かに響く。
その瞬間、

ゴオオ！！！と、またもや炎の竜巻がサトシ達を襲う。

サトシ「うわっ！？」

ポケモン達も、その凄まじい熱風の前に成す術もなく立ち止まってしまう。

ゴオオオオ……燃え盛る炎。

その向こうにたたずむ漆黒の人物を、サトシは何とか視界に入れる。

サトシ「く……！お前は…一体……」

「何者だ！？」と言葉を続けようとするサトシ……が、

？？？「……」

ギン……

サトシ「ウッ……！？」

ゴオオオ……

炎の熱気でその姿が揺らいでいる……

顔は頭からかぶったフードの闇で見えないのだが、何故か一瞬睨まれた気がした。

？？？「……」

瞬間、

フッ……と、

漆黒の人物とそのポケモンは……その場から消えた……

……

ジュンサー「あっ……し、しまった！！」
カスミ「逃げられたわね……」
炎は既におさまっており、まるで何事も無かったかの様に、辺りに再び夜の静寂が戻る。
ジュンサー「まだ近くにいるかもしれない！すぐに防衛線を張って！」
ジュンサーが部下の警官達に指示を送った。
警官達が慌ただしく動いている……
タケシ「何だったんだアイツは……」
そんな中サトシ達はしばらく呆気にとられていた……が、
サトシ「……」
タケシ「……？サトシ……？」
サトシはしばらく美術館の屋根の上を睨んでいた。
……何だ……？何かしらないけど……
サトシ「……めっちゃくちゃ悔しい。」
タケシ「まぁ、逃がしちゃったしな。」
サトシ「それもあるけど……何か……バカにされたって言うか……。」
カスミ「は？」
「何言ってんのコイツ？」といった風な顔でサトシを見るカスミ。

サトシ「……後一歩の所まで追いつめたのに、後から来た訳わかんないヤツに邪魔されて……、で、何もできないまま結局どっちにも逃げられて……」

何より、あの時一瞬でも怯んでしまったのが悔しい。あの時の自分はまさに、「蛇に睨まれた蛙」状態だった。

サトシ「……我ながらみっともないぜ……。」

グ……と、サトシは拳を握りしめた……

異変……そして意外！？

ザワザワザワ……
風で木々が揺れる音が静かに響く……
この時期にしては珍しい程の日射しも、生い茂る枝葉によって遮られあまり気にならない。
ここは一言でいうと、森だ。
樹齢千年を超えるであろう巨大な樹木。あまりにも透き通った川。
まるで違う世界にでもいるかの様な錯覚を覚える程の、広大無辺な場所。
そしてそんな中、明らかに浮いている人物が一人……

ハルカ「ふぅ。これくらいにしとこうか……。」

コンテストも休み、ただいま音信不通状態のハルカがポケモン達に言う。
その言葉にバシャーモ等ハルカの手持ち達は技の構えを解き、主人の元へ集まった。

ハルカ「みんなお疲れ様。はい、ご褒美。」

そう微笑みながらポロックをポケモン達に与える。ポリポリと、嬉しそうに食べているバシャーモ達。
ハルカはその光景を見ながらしばし物思いにふけった。
……しばらくコンテストも出てないなぁ……きっと腕も鈍ってるかも……
シュウやサオリさん……ハーリーさん……ヒカリにもサトシとかにも最近会ってないし……

ハルカ「……サトシ……か……」

ハルカの脳裏にかつてホウエン、カントーを共に旅した帽子の少年が浮かぶ。

もしサトシに会っていなかったら……きっと自分はコーディネーターにはなっていなかっただろう……それどころかポケモン達と触れ合う事もなかったかもしれない……。

ハルカ（……今じゃ信じられないかも。）

もしもの事を考えると急におかしくなって思わず笑ってしまうハルカ。……だがすぐに、ハァ……とため息をつく。

……会いたいなぁ……皆に……

それに……答えも出さないと……

ふと、そんな事を思う。だがまたすぐに気を切り替え、

ハルカ（ダメダメ！私は強くなるって決めたんだから……！それまでは余計な事考えちゃダメ！我慢よ我慢……！）

バシャーモ「シャモシャ……？」

しばらく黙り込んでいたハルカを心配してか、バシャーモがかがんでのぞき込んできた。

見るともう全員がすでにポロックを食べ終えてハルカの方を見ていた。

ハルカ「ああゴメンゴメン！何でもないのよ！ちょっと考え事してただけかも。」

ハルカは慌てて表情を直した。今私どんな顔してたんだろ……？

ハルカ「っていうか遅いなぁあの人……」

ハルカは今ある人と待ち合わせをしていた。
普通はこんな所で人と待ち合わせなどしないだろうが、ハルカはコーディネーターとして大分顔が知られてしまっているため、人とゆっくり話したい時はこういった人気の無い所の方が良かったのだ。
それでも極端な気はするけど……。
しかし肝心の相手がなかなか来ない……。また特訓再開しようかな？……いや、自分もポケモン達もお腹すいてきたし……

ハルカ「う～ん……しょうがないから先にお昼にしちゃ……」
？？？「よぉ！待たせちゃったかい？」
ハルカ「！……いきなり背後から現れるのはやめてもらえますか？」

いつの間にやらハルカの後ろにはニヤニヤ顔を浮かべた金髪の男が立っていた。ハルカが待っていた人物だ。
一言でいうと……チャラい。
と言っても服装や見た目などはそんなでもないのだが、しゃべり方とか雰囲気がチャラい。

？？？「そんな顔すんなよぉ～！別にやましい事は考えてねぇんだし。ま、もうちょいしたら考える予定なんで、よろしくな。」
ハルカ「何が？」

ハルカはこの男に会ってから浮かべている呆れ顔をさらに強く浮かべた。
確かにイケメンだけど……中身とのギャップありすぎかも……
……同じイケメンならやっぱシュウの方が……
だがハルカはそこで考えるのをやめ、はかば強引に話を切り替えた。

ハルカ「ッッッ……もうっ！それより本題に入りましょーよ本題に！私は忙しいんですぅっ！！」
？？？「なーにが忙しいだよ話変える口実のくせにぃ。お前は今で言うアレだ……ツンデレだな！」
ハルカ「……川に沈めてやろうかしら。」
？？？「わ、わかった……！わかったから真顔でポケモンつれてくるのはやめろ！！」

ギャーギャー響き渡る声は、神秘的な場所にいるこの二人をさらに浮かび上がらせていた……。

タマムシシティ・ポケモンセンター。
サトシ達はポケモンセンターの食堂で朝食をとっていた。備え付けのＴＶでは朝のニュース番組が流れている。

キャスター「では次のニュースです。最近深刻化している各地の干ばつ被害について、政府は昨日、特別対策案をまとめる方針を伝えました。この特別対策案は……」
タケシ「干ばつか……。温暖化というやつか？」
カスミ「水ポケモン達への影響が心配ね……。」

広範囲に及ぶ原因不明の干ばつ被害。

数年前から目立った被害が出始め、各地の人々は言い知れぬ不安にかられていた。

サトシ「……何か、あの時を思い出すな……。」
タケシ「あの時？」
サトシ「ほら……ホウエンのグラードンとカイオーガの戦い。」
カスミ「ああ、アレね。私もテレビで見たわ。凄かったらしいわね……。」

サトシはかつて関わった伝説ポケモンの戦いを思い出す。
大陸ポケモン、グラードン。そして海底ポケモン、カイオーガ。約六年前、サトシ達はその二匹を手中におさめ世界征服をもくろんでいた組織、マグマ団とアクア団に遭遇した。
しかしどちらもグラードンとカイオーガの人智を超えた力に愕然とし、結局その二匹を操ることを諦め解散。彼らの野望は泡と消えた。

サトシ「……あの時はカイオーガが暴走して大雨降らせて大変だったけど……今度は干ばつか……。」
カスミ「……まさかまたマグマ団とかいう奴らが復活して……？」
タケシ「いや、それはないだろう。奴らは完全にグラードンとカイオーガを操るのを諦めていた。」

サトシ達がそんな事を考えていると、番組のニュースが切り替わった。

キャスター「次のニュースです。先日カントー地方のタマムシシティ・タマムシ美術館で強盗事件が発生し、古代ポケモンに関わる資料一点が盗まれました。タマムシ美術館はカントーでは随一の規模を誇り……」

サトシ「あ、美術館映ってる。」

テレビにはタマムシ美術館の前でインタビューを受ける美術館の館長が映し出されている。

館長「あれは先日見つけたばかりで、研究が進めば新たなポケモンの存在が判明するかもしれないとても貴重な物でした……。一刻も早く……」

タケシ「そんな貴重な物を盗まれたのか……。」

カスミ「あれから何日か経ったけど、結局何も掴めてないってジュンサーさん言ってたわね……。」

サトシ「しっかし何でこう俺達は毎度面倒に巻き込まれるんだ？」

カスミ「達じゃなくて「俺」ね「俺」。」

サトシ「まるで俺が面倒持ち込んできたみたいな言い方だな……。」

カスミ「そう言ったんだけど？」

サトシは何やらブツブツと文句を言いながら食堂のカウンターへ食器を下げに行った。すると、

ブーッ……ブーッ……と、彼の携帯が震えた。

サトシ「ん？メール……誰だ……？」

ディスプレイには「ヒカリ」と記されていた。

ヒカリ

サトシ久しぶり～！元気してた！？

何でいきなりメールしたかというと……何とあたし、今カントーにいるのでーす！ノゾミも一緒だよ（≧∇≦＊）

それで久しぶりに会えないかなと思ってメールしました！

お返事待ってま～す！♪

思わずサトシの顔がほころんだ。

午前１１時
ヤマブキシティの公園。

ヒカリ「サトシィ～！タケシィ～！」

噴水の向こう側からニット帽をかぶったヒカリが走ってくる。その少し後をノゾミがゆっくり歩いている。

サトシ「おおヒカリ！久しぶりだなぁ！ノゾミも大きくなったな～！」

ノゾミ「アタシは子供かい……。」

サトシ達は断る理由も無いので、後日ヒカリ達と公園で待ち合わせて久しぶりに遊ぼうということになった。

ヒカリ「あっ！カスミさん直接会うのは初めてですよね！？わたしヒカリです！こっちは友達兼ライバルのノゾミ！よろしくお願いしま～す！」

ノゾミ「よろしく。カスミさんはジムリーダーなんだよね？今度バトルしたいな。」

カスミ「よろしくね。それと二人とも、アタシのことはカスミで良いから。さん付けってちょっと苦手なのよね～。」

ヒカリ「じゃあカスミは彼氏いるの！？」
カスミ「ヒカリ……何が「じゃあ」なのかしら……」
楽しそうに話すガールズ三人に軽く嫉妬（？）したサトシはすかさず話題を振った。
サトシ「でも二人とも何でカントーに？」
ヒカリ「ふっふっふ～。それはね……」
「アレ！」と指差しながらヒカリは言う。その先を見てみると、何やらデパートにポスターが張ってあるのが見えた。どうやらコンテストの張り紙らしい。
ヒカリ「明後日に開かれるここのコンテストに出るために来たの。でもただのコンテストじゃないのよ～？何とあのミクリ様が主催者として審査員に加わるんですって！」
やや興奮気味にヒカリが説明する。へぇ～、前にシンオウでやったミクリカップみたいなもんか……
しかし以外にもカスミがこの話に食いついてきた。
カスミ「えっ！？ミクリさんここに来るの！？えっ……マジ！？」
タケシ「ずいぶん嬉しそうだな。」
カスミ「そりゃそうよ～！だってアタシ、ミクリさんの大ファンだもの！！」
サトシ「そうだったのか。まぁミクリさんと言えば、ホウエンの「チャンピオン」にして、「コンテストマスター」にして、「水ポケモンマスター」の超スーパーな人だもんな。」
おまけに超イケメンだし。全国の女性の憧れの的であるとともに、

全国の男性の嫉妬の対象……なんだろうな……。
まさに「全てを持っている男」。それがミクリなのだ。

カスミ「決めた！私もそのコンテスト出るわ！！」
サトシ「へぇ～そうなんだ……っては？」
カスミ「だから！私もヒカリ達と一緒にこのコンテスト出るって言ってんの！」

シン……一瞬の沈黙……

サトシ「えええええええ！！！？？カ、カスミがコンテストだとおおおおお！？」

突然のカスミの宣言に流石のヒカリとノゾミも目を見開いている。

タケシ「おいおい本気かカスミ？これにはヒカリもノゾミも出るんだぞ？熟練の二人相手にシロウト同然のお前に勝ち目は……」
カスミ「勝敗はどーでも良いのっ！とにかくこれは、憧れのミクリさんにアタシの存在をアピールするチャンスよ！！」
サトシ「アピールしすぎて逆に引かれるんじゃないか……ぐふっ！？」

カスミのハイキックがサトシの腰にクリーンヒットした。効果は抜群だ。

カスミ「さぁて、そうと決まればさっそくコンテストパスの発行よ！ヒカリ！ノゾミ！パスの作り方教えて！」
ヒカリ＆ノゾミ「ハ…ハイィ！！」

サトシが撃沈されるのを目の前で見ていた二人は、冷や汗をかきな

がら元気に返事をする。
カスミ等三人は物凄い勢いでその場を離れて行った……。
タケシ「……こりゃ面白い事になりそうだなサトシ。お前も出てみたらどうだ？」
サトシは先程のダメージに未だうずくまったままだ。
サトシ「絶対イヤだね……。アイツより目立ったら俺もう多分この世にいない……」
ハァ……一体どうなることやら……。

失礼のないように

ヤマブキシティ・コンテスト会場前

カスミ「コンテストパスも作ったし、エントリーも完了！これで準備万端ね！」

コンテスト当日。
エントリーを終えたヒカリ、ノゾミ、そしてカスミが会場の受付から戻ってきた。
会場前の広場にはエントリーを終えた人や観客がすでに集まりはじめている。今回はミクリが主催者および審査員を勤めるとだけあって、出場者も観客もすごい数だ。

サトシ「なぁおい、マジで出んのかカスミ？」
カスミ「文句あんの？」
サトシ「いえ、ありません……。」

コンテスト開始約2時間前。
さっきからこの様なやり取りが続いている……。

タケシ「それにしても、今回はミクリさんが審査員を務めるだけあって周りも気合い十分って感じだな。」
サトシ「ああ。みんな燃えてるな！」
ヒカリ「ノゾミ！絶対負けないからね！」
ノゾミ「ああ。でもリボンは私がもらうよ？」
サトシ「おおっ、こっちも燃えてるな！」
カスミ「ミクリ様！必ずあなたを振り向かせて見せます！！」

違う意味で燃えてる人一名……

タケシ「まぁカスミはともかく、ここにハルカが居れば、シンオウのミクリカップの完全再現になったんだけどな。」
サトシ「そういやそうだな。」

ミクリカップか……懐かしいな……
ハルカとヒカリのバトル……俺は結局最後までどっちを応援するか決められなかったんだっけ……
でもアイツは……

サトシ「……ん？あれは……」
タケシ「どうしたサトシ？」

サトシの視線の先に目を向けるタケシ。そこには何やら沢山の人だかりができていた（といっても殆どが女の子だったが）。
よく聞いていると「キャー！ウソ本物！？」とか、「かっこいい～！こっち向いて～シュウ様ぁ～！」などと女の子達の悲鳴に近い声が聞こえてくる。
……ん？シュウ様……？

シュウ「ありがとうございます。ハイ、これで良いかな？」
ファン「あ、あああああありがとうございます！！」

差し出された色紙にサインして女の子に返す美少年。
その人だかりの中心にはまさしく、笑顔でファンの女の子達に応えているシュウの姿があった。

タケシ「何でアイツばかりいつもモテるんだ……」
サトシ「まぁ生まれ持った才能の差じゃね？お～いシュウ～！！」

タケシを適当にあしらいシュウを呼ぶサトシ。シュウはその声に気づき、ファン達に「また今度ね」と一言そえてこちらに歩いてきた。

シュウ「やぁ。久し振りだね。」
サトシ「久し振りだな。元気だったか？」
シュウ「ああ。この通り。」

ファン達はシュウとサトシ達が親しげに話す所を見てバツの悪そうな顔をして離れていった……。

シュウ「…と、そちらはヒカリさんとノゾミさん、それにハナダジムのジムリーダーのカスミさんだね。初めまして。シュウと申します。」

そう言って微笑みながら会釈するシュウ。その瞬間周りから「ハゥッ！」という女の子らしき声が聞こえたとか……。

カスミ「カスミよ。よろし……」

ヒカリがいきなりカスミを押しのけて前へ出る。

ヒカリ「は、はははは初めまして！シュウさんですよね！？」
シュウ「ああ。そうだけど……」
ヒカリ「わ、わわ……わたし、ヒカリと言いいます！よ、よろしくお願いします！」
サトシ「おいおいヒカリ何だそのテンパり振りは？」
ヒカリ「だ、だってシュウさんと言ったらコンテスト界では知らない人がいないくらい超有名人じゃない！！ってかサトシ、シュウさんと知り合いだったの！？何で教えてくれなかったのよ～！」

サトシ「何でって言われても……。」
興奮するヒカリをよそに、今度はノゾミが前に出てシュウに握手を求めた。
ノゾミ「ノゾミと言います。会えて光栄ですシュウさん。」
シュウ「よろしく。そう言ってもらえると嬉しいよ。」
そう言って握手をするノゾミとシュウ。
サトシ「お前もここのコンテストに出るのか？」
ヒカリ「サ……サトシ、シュウさんに何て口の聞き方……」
シュウ「いや、僕は今回は出ないが、ミクリさんが主催するコンテストだからね。観戦に来たと言うわけさ。」
サトシ「へぇ、珍しいな。お前が出ないなんて。」
シュウは何故か一瞬表情が暗くなったがすぐに笑顔で、
シュウ「フッ…。たまには観戦でもして色々学ぼうかと思っただけさ。」
サトシ「ふぅん。良かったなぁカスミ。強敵が一人減って。」
サトシがふざけてカスミに言う。その瞬間カスミはサトシを思い切り睨みつけた……。
シュウ「ん？カスミさんもコンテストに？」
カスミ「まぁね。でも私の目的はあくまでミクリさんだけど。」
シュウ「……そうなんですか。観客席から応援しています。それじゃ僕はこれで。」

と、シュウがいつものように左手をポケットに突っ込み、右手を上げながら背を向けて立ち去ろうとした……が、

サトシ「そういやシュウ。ハルカの事聞いたか？」

サトシがシュウを呼び止めた。

シュウは一瞬ピクッと動いて、

シュウ「……ああ。何でも集中特訓しているらしいね。」

いつもより少しだけ低い声で答えた。

サトシ「らしいな。しっかしアイツも良くやるよなぁ～。コンテストも休んで、しかも周囲を完全シャットアウトしてだぜ？」

シュウは黙って聞いている。

サトシ「俺でもそんなんやったことねぇっての。ったくいつまで潜ってるつもりなんだか。」

シュウ「ああ……そうだね……。」

シュウの様子には目もくれず一人話し続けるサトシ。

サトシ「ま、でも出てくるのが楽しみだけどな！そしたら即バトル申し込んで……」

シュウ「すまない急いでるんだ。じゃ。」

シュウは突然サトシの言葉を遮り、そのまま去って行ってしまった……。

サトシは怪訝な顔をしながらシュウの背中を見る。

サトシ「……？なーんだアイツ？観戦するなら一緒に行こうと思ってたのに……。」
タケシ「確かに少し様子が変だったな……。」
カスミ「わかってないわねぇ～あんたら。」

カスミが得意げに二人に言う。

サトシ「は？どういうことだよ？」
カスミ「まぁアンタに説明してもわかんないでしょうね。」
ヒカリ「えっ？まさかカスミ……ええ！？」
ノゾミ「へぇ。まさかあの二人がねぇ～。」

ヒカリとノゾミはカスミが言わんとしている事に気がついたようで、ノゾミに至ってはニンマリしている。

サトシ「んだよ……。俺だけカヤの外かよ……。」
ヒカリ「ああ～シュウさんにサインもらえば良かったぁ～……。」
ノゾミ「追いかければまだ間に合うんじゃない？」
ヒカリ「いや……今の空気じゃ行きづらいって……。」
カスミ「でもこれは面白いドラマが見れそうねぇ～。」

カスミがサトシを横目で見ながら誰にも聞こえないように呟いた。

タケシ「っと三人とも、コンテストの事忘れてないか？」
ヒカリ「あ！もうこんな時間！？最後の調整しなきゃ～！」
ノゾミ「突然のイベントにうっかりしてたね……。」
カスミ「そうだ！アタシもミクリさんにアピールしなきゃいけないんだった！」

そう言ってヒカリ、ノゾミ、カスミの三人は広場の方へ散らばっていった……

タケシ「じゃあ俺達も会場に入るか。」
サトシ「そうだな。にしてもカスミのヤツ、俺を子供扱いしやがって……」

サトシは何やらブツブツ文句をたれながらも会場内へ入っていく。
タケシ（……さ～てサトシ、いよいよ本気でウカウカしてられないぞ？）

タケシもまたサトシの後を追って会場内へと向かった……。

シュウはコンテスト会場には入らず、一人道端を歩いていた。
１３時４５分……あと１５分程でコンテストが始まる。そろそろ戻らなくては……
しかし、シュウの足取りは重い。
さっきは適当な事を言って何とか誤魔化した……いや、嘘ではなかったのかもしれないが……
シュウはこれまでコンテストというコンテストには積極的に出場していた。しかし最近は全く出ていないという訳ではないのだが、その頻度は落ちていた。
別にコンテストが嫌いになった訳でも、スランプに陥っている訳でもない。

ただ……どうにもコンテスト会場を前にするとハルカの事を思い出してしまう。
少し前までであれば特段それは問題ではなかったのだが……
……

数ヶ月前、ハルカから突然きた電話。

シュウ「修行？」
ハルカ「うん。しばらくコンテストも休むわ。それと多分、連絡もあまり取れなくなると思う。」
シュウ「それは随時な力の入れようだね。」
ハルカ「まぁね。今の自分のままじゃ駄目だと思って。だからちょっとの間音信不通になると思うけど、心配しないでね。」

電話越しのハルカの声はどこか寂しそうで、しかし決意に満ちたものだった。

シュウ「わかった。ちゃんと三食とるんだよ？」
ハルカ「だ、だから心配しないでってば！ってゆーか子供扱いしないでほしいかも！」
シュウ「ハハハ。冗談さ。」
ハルカ「……それと……この前の事なんだけど……
……」

さっきまでの勢いはどこへやら。ハルカは急にモゴモゴと言いづらそうに口ごもった。

シュウ「……いいよ。」
ハルカ「え？」

シュウ「急いで答えを出さなくてもいいってことさ。じっくり考えて答えてもらわないと意味はないからね。」

もうわかると思うが、先日シュウはハルカに思い切って告白した。しかしハルカはまだ戸惑っていた様で、すぐに返事をくれなかった。そして今の状況に至る。

ハルカ「で、でも……さっきも言ったけど、私これからしばらく……」

シュウ「待つよ。それからでも構わない。君がちゃんと答えを見つけられるまで、僕は待つから。」

そう。どんな答えでも……ね……

ハルカ「……わかったわ。そういう事なら……今は……」

シュウ「ああ。じっくり考えてくれ。」

そうは言ったものの……あれからはや3ヶ月。どうにも気になってコンテストにも集中できない。シュウにとっては一大決心の告白だったのでなおさらだ。

何度も電話してみようという衝動にかられたが、あの時の真剣なハルカの声を思い出し、邪魔してはいけないとなんとか我慢した。

今日ここに来たのだって、もしかしたら彼女もこのコンテストに出場しているかもしれないという希望があったからだ。

シュウ「ふぅ……。そろそろ僕も気持ちを切り替えないと……。」

ワアアアアアアアアアア……

会場から歓声らしきものが聞こえてくる……コンテストが始まったのだろう。

シュウ「……」

『待っててシュウ。必ずもっともっと強くなって戻ってくるから！』

シュウ（……僕も頑張らないと、君が強くなって戻ってきた時、失礼だからね。）

フッ……と、不敵に笑う。

そして……例えどんな答えでも……僕は誠心誠意、君の想いを受け止めるよ……

シュウはゆっくりと会場へ向かって歩き出した……

カスミ、コンテストデビュー！？

司会「さぁ～やってまいりましたポケモンコンテスト・ヤマブキ大会！今大会は何と！あの「コンテストマスター」……ミクリさんが審査員を務めてくれるぞ！？」

ワアアアアアアアアア…………………

鼓膜が破れそうになる程の歓声が場内を包む。

タケシ「グランドフェスティバル並みの盛り上がりだなぁ！！」
サトシ「ツッツッ！！「すげぇ」通り越してうっせぇ！！」

サトシ達の話し声も自然と大きくなる。そうしないと周りの歓声にかき消されてしまうからだ。

ステージではミクリが何やら挨拶をしている。

ファン「キャーーー！！ミクリさまあああああ～！！」
ファン「あっ！ミクリ様今私にウィンクしてくれた！？」
ファン「何言ってんの！？私にしてくれたのよ！！」
ファン「いーやアレは私に……」

サトシのすぐ横の女の子達が騒いでいる。辺りを見てみると、ミクリの姿が印刷されたウチワやら手作りらしき旗やらを持った女の子達が沢山いた。

サトシ「シュウもこんな風になるのかな………」
タケシ「や、もうなってるがな。……っくぅ～！悔しいっ！！」
サトシ「そういやシュウは来てんのかな？」
タケシ「さぁ、どこかにいるんじゃないか？」

サトシは会場を見渡してシュウを探してみるも、人でごった返している中では見つかるわけもなく、すぐに諦めた。
さっきはアイツ、何か様子が変だったけど…………

司会「それじゃあ皆！盛り上がって行こおおおおおお！！」

ワアアアアアアアア…………
流石は司会のプロ。会場を盛り上げるのはお手の物。

シュウ「…………」

シュウは客席には座らずに、入り口付近の壁にもたれかけて見ていた。
司会がステージ脇に移動する。どうやら第一次審査が始まるようだ。
司会「では早速まいりましょう！第一審査、トップバッターは何と！ジムリーダー界からのスペシャルゲスト、世界の美少女カスミさんの登場だ！！」

ワアアアアアアアア…………
スポットライトがステージに当たる。
するとカスミが意気揚々と中央に歩いてきた。
満面の笑み…………それを向ける方向はただ一点…………
…………

ミクリ「……」

審査員席に座るミクリは笑顔でカスミを見つめている。

カスミ「ミクリさんが……！ミクリさんがアタシに微笑んでくれてる！！ああ～もうこれで満足かも……！」

サトシ「へっ。「世界の美少女」だってさ。「水ポケモンマスター」の称号は封印か？」

タケシ「流石にミクリさんの前でソレは言えないだろう……。」

サトシ「にしてもアイツ……ミクリさん見すぎ……。」

観客席からでもわかる……早く演技しろよ……

カスミ「ミクリさん……し～っかり見ててくださいね！行くわよ！マイステディ！！」

ボン！！ボールから現れたのは……ニョロトノだ。

司会「カスミさんのパートナーはやはり水ポケモン！ニョロトノがキュートに登場です！」

サトシ「ニョロトノか。」
タケシ「さぁ～どんなステージになるかな？」
カスミ「行くわよニョロトノ！周りにバブルこうせぇ～ん！！」

ドパパパパパ！！
ニョロトノが辺りにバブルこうせんを撒き散らす。

カスミ「そこでサイコキネシスぅ～！！」

ビタァ！！と、撒き散らされたバブルこうせんがサイコキネシスで空中に止まる。

司会「カスミさん！バブルこうせんにサイコキネシスのグラデーションをほどこし、美しいピンク色の泡に変化させました！さぁここからどう運ぶのか！？」
シュウ「……」
カスミ「フィニッシュよニョロトノ！あ～ま～ご～い～！！」
サトシ「何でそんなのばすの？」

カスミが両手を上げ空を仰ぐ様に指示する。ニョロトノの動きもシンクロしている……
すると頭上に雨雲が現れ、
サーーーーーーと、静かに雨を降らす。と同時に、その雨粒が空中の泡を打ち、
パパパパパパと、次々と破裂させていった。

司会「これは何と！空中のピンク色の泡が雨により割られ、ステージ全体に幻想的な水しぶきを広げました！！」
コンテスタ「流石はハナダシティジムリーダー。水の美しさを存分にアピールしたステージでしたね。」

スキゾー「いや～好きですねぇ～。」
ジョーイ「とてもキレイです！ニョロトノとの息もピッタリですね！」

カスミは天を仰いだ姿勢のままミクリの方へ向いた。
どう？アタシの演技……

サトシ「カスミのヤツ……またミクリさんに視線送ってやがる……」
タケシ「でも初めてにしては良いステージだったじゃないか。昔の水中ショーの経験が役に立ったな。」

一方、控え室では……

ヒカリ「カスミすごい！やるじゃない！」
ノゾミ「少し教えただけなのに……流石はジムリーダーだね。」
ヒカリ「こりゃ、強敵が一人増えたわね！」
ポッチャマ「ポチャマ！」

控え室のモニターにはミクリからの評価を受けているカスミが映し出されている。

『水ポケモンと水の美しさを存分に引き出した、実に素晴らしいステージだった！』
『あああああ、ありがとうございます～！！』

ちょっと前のヒカリみたいになってる……
カスミは満面の笑みでステージ脇へと戻っていった。

シュウ（……流石……と言ったところか……。）

腕を組みながら静かに観戦しているシュウ。視線の先には演技を終え戻っていくカスミが……

ジムリーダーのコンテストへの介入……別にこれが初めてではない。シンオウのメリッサも、コンテストを広めるため積極的に出場していると聞く。

そのかいあって、数年前まで認知度が低くあまり盛んではなかったシンオウ地方でも、今ではすっかりコンテストが浸透している。

今回のカスミの出場は、このカントー地方のコンテスト界にも良い刺激になったことだろう……。

……変わっていく……コンテストも……コーディネーターも……

シュウ「……僕も、このままではいけないね……。」

周りに聞こえないように呟く。

その目には確かに、決意の光が宿っていた……

結局今回のコンテストで優勝をおさめたのはノゾミだった。
カスミは二次審査に進みコンテストバトルでノゾミと当たり戦っが、とにかくバトルオフを狙って攻め続けたカスミに対し、ノゾミはそれを華麗に回避し続け、最後はポイントで決着。
その後の決勝ではヒカリとノゾミが戦い、僅差でノゾミが勝利。ライバル対決は接戦の末幕を閉じた。

カスミ「ハァ。やっぱコンテストは難しいわね～……。」
ノゾミ「でもたった一日の特訓であの演技は凄いよ。流石だね。」
ヒカリ「ま～たノゾミに差つけられちゃったなぁ……。せっかく追いついたと思ったのに～。」
カスミ「ま、ミクリさんにはしっかりアピールできたし、良しとしましょうかね。」

サトシ達はコンテスト終了後、近くのカフェでお茶をしていた。シュウも誘おうと思ったのだが、すでにどこかへ行ってしまったらしく見つけられなかった。

サトシ「すいません！バナナパフェ一つ！」
カスミ「あんたね……」

カスミはため息をつきながらサトシを見る……

タケシ「ヒカリとノゾミは一緒に各地を回っているのか？」
ヒカリ「ううん。別々に行動してるわ。たまにコンテストで会うけどね。」
ノゾミ「タケシ達は一緒に旅を？」
カスミ「まぁね。コイツのわがままで。」

そう言いながらパフェにがっつくサトシを指差す。

サトシ「バ、バガママッデダンダヨ！（わがままってなんだよ！）」
ヒカリ「ふぅん。何か目的はあるの？」
サトシ「もちろんあるぜ！俺は強くなるために旅に出たんだ！」
ピカチュウ「ピッカッチュウ！」

パフェを飲み込んだサトシは顔を輝かせながら言う。

ノゾミ「ずいぶんと抽象的な……」
ヒカリ「アハハハ！サトシらしい～！」
タケシ「まぁサトシだけでなく、俺達の修行行脚でもあるけどな。」
ヒカリ「修行かぁ……。ハルカも頑張ってるのかなぁ……。」

ヒカリは遠くの方を見る目をしながら呟く。どこか寂しそうな声だ。

カスミ「ヒカリはハルカと仲良いの？」
ノゾミ「そりゃもう、実の姉のように甘えまくって……」
ヒカリ「ちょ……ちょっとノゾミ！？」
タケシ「ハハ。ああ見えてハルカは姉御肌なところがあるからなぁ。」

まぁ実際からかわれているのはハルカの方だったりするのたが……
……
それでも一人っ子のヒカリは姉という存在にずっと憧れていたので、ハルカのことはコーディネーターとしての好敵手以外の意味でもよく慕っていた。
ゆえに、今はちょっぴり寂しいというのも本音であった。
姉御肌……サトシはチラッとカスミを見て、
サトシ「どっかの誰かさんとは対象的だな。」

カスミ「バナナパフェ頼むヤツに言われたくないわよ。」
ヒカリ「でもわたしカスミに会えて良かったわ！話してて楽しいし優しいし！」
サトシ「おまえこの前ノゾミと一緒に思い切りビビってたじゃん……イテェ！？」

カスミがテーブルの下で思い切りサトシの足を踏みつけた……。

カスミ「可愛いわねヒカリは～！ハルカの気持ちもわかるかも……何てね！」
サトシ「うおっ！何か知らねぇけどスゲェ耳障り！」

この後、ヤマブキシティのカフェテリアにはサトシの悲鳴が響き渡ったという……

午後7時。
ヤマブキシティ・ポケモンセンター。
ヒカリ達とはカフェを出た後別れた。今はポケモンセンターのロビーでポケモン達の回復を待ちながらくつろいでいる。

サトシ「おーイテ……。ったくアイツ、少しは場所わきまえろよな……。」

カスミはシャワーを浴びると言って、センターに併設する宿泊施設

に先に行き、タケシは自宅のジムに電話しに行ったので、今ここにいるのは旅仲間ではサトシのみだ。

サトシ「あの暴力女め……。」

サトシはまだ何か言っている……

もちろんサトシもあの場では冗談で言ったのだが、しかしどういう訳か、カスミから「かも」という単語が出てきた時、何かしっくりこないというか、悪く言えば嫌な感じがしたのだ。

理由は解らない……が、自分は確かにそう思っている……

……。

まぁ「かも」はアイツので聞き慣れてるからかな？

なら……同じ様にカスミが「ダイジョバナイ」とか使ったら……

……やっぱ同じこと思うのかな……？

サトシは今自分自身の感情に困惑していた。

サトシ「ッッッッ～！ッああ～！！何だコレは！？何に悩んでんだ俺は！？」

タケシ「俺に言われても……」

サトシ「うわ！？タ、タケシ戻ってたのか！？」

タケシ「まぁ……ついさっきな。それより、悩みがあるなら聞くぞ？」

サトシはタケシにさっきの事を話してみようかと思ったが、やっぱりやめた。

何か……聞きづらい……

サトシ「いや……いいよ。俺はもう子供じゃないのだ。」

タケシ「はぁ？」

サトシ「いーからいーから。ホテル戻ろうぜ。」

そう言ってロビーを出るサトシ。
タケシはポカンとした顔で歩いていくサトシを見ている。
タケシ「……アイツまで様子がおかしくなったか……。」
この悩みの正体が解らない時点でまだ子供だということに、サトシは気づいていない……

ヤマブキシティ・ポケモンセンター前。
???「そろそろ行くか？」
???「そうだな。ボスもしびれを切らす頃だろう。」
物陰で男が話す声が聞こえる……
???「彼は仲間に危機が迫ると、途端に周りが見えなくなる様だからな。このやり方であれば恐らく成功するだろう。」

男がゆっくりと振り向きながら、静かに言う。
その視線の先には……
ヒカリ「……」
両手と口を縛られ、ヒカリが目を閉じて横たわっていた……
……
???「麻酔はあとどれくらいもつ？」
???「はっ。まだ１０時間はもつかと。」
???「ふむ。十分だな……。」
男はホテルへ入っていくサトシとタケシを見る。いや、正確にはサトシのみだ。
???（……あんなガキが……「最凶のポケモン」のパートナーになるのか……？）
ふと疑問に思う……が、
???（……我々はボスに従うのみ……。）
すぐに、その思考を止めた。
???「どうした？」
仲間の一人りが怪訝な顔をして声をかける。
???「何でもない。始めるぞ。」

静かに……だが確かに……「闇」は動き始めていた……

……

嬉しいサプライズ！？

例のどこかのビルの地下……
薄暗く、何となく冷たい印象を感じさせる場所。

シド「……ああ。どうやらとうとう動いたらしい。」

サカキの部下……つまり「ロケット団」のシドが、その低い声で言う。
携帯で誰かと電話しているらしい。

シド「……心配するな。最悪の事態にはならない。うまくいく。」

電話の相手は何やら焦っているのか、シドはなだめるような言葉をかける。まぁ、あまり抑揚のない、堅い喋り方なのだが……

シド「……お前はお前の仕事をこなせ。こちらの事は気にするな。」

だが彼の気持ちは確かに伝わっている様だ。電話の相手は次第に落ちつきを見せる。とそこへ、
カツ、カツ、カツ、カツ……と、靴音が響く。

シド「……また連絡する。」

それに気づき、シドは電話を切る。

ルカ「……お電話ですか？」

現れたのは、以前タマムシ美術館に忍び込んだ超美人エージェント、ルカだ。

シド「ああ。別働隊がついに、マサラタウンのサトシの捕獲を決行したらしい。」

シドは振り向かずに答える。

ルカ「そうですか。やっとですね。」

シド「確実にこなしたいのだろう。何もなければうまくいく筈だ。」

そう言ってシドはタバコをくわえ、ジッポで火をつけた。

フゥーーー……と、煙を吐く。

ルカは黙ってそれを見ている……

ルカ「……あの時は危ないところでした……。」

苦い顔をしながらルカが言う。

彼女の言う「あの時」とは、タマムシ美術館での作戦の事だろう。

ルカ「……ありがとうございました。」

シド「……フン。珍しいな。いつもの自信はどうした？」

ルカはうつむいたまま、しばらく答えない。

シド「……まぁいい。今は目の前の任務をこなせ。それだけだ。」

ルカ「……はい。」

カツ、カツ、カツ、カツ……
ルカはその場を去って行った……
シドは一人タバコをくわえたまま立っている。
ブーッ…ブーッ…ブーッ……彼の携帯が震えだす。どうやら電話のようだ。

シド「……俺だ。」
部下「『水の民』と思われる者達の足取りが掴めました。」
シド「数は？」
部下「恐らく４。」
シド「よし。偵察を続けろ。後はおって連絡する。」
部下「了解。」

ピッ……電話を切る。
『水の民』。かつてポケモンと心を通わす事ができたとされる、大昔に栄えた一族。
既に絶滅したと考えられていたが、十数年前、数人ではあるがその存在が確認された。
しかし、彼らに関する遺物や書物はほとんど残っておらず、その歴史の真相は結局謎のまま。
解っている事といえば、「高い技術力」を持っていたであろうという事だけだ。
シドに与えられた任務は、その『水の民』の生き残りの捕獲。
ロケット団の研究チームが、彼等が『ワダツミ』と深く関わっているという見解を示したためである。
『ワダツミ』、『水の民』、『マサラタウンのサトシ』。
現在のロケット団の主なターゲットは、この三つ……

シド「……」

無表情……何を考えているのかその顔からは全く解らない。
コツ、コツ、コツ、コツ……
シドはポッケに両手を突っ込みながら、その場を去った……
……

???「ふぅ。遅くなっちゃったなぁ……。」

確かに空にはもう星が輝いている。
しかし大都市だけあって「この街はこれからだぜ！」と言わんばかりに、街灯やらネオンやらがらんらんと輝いている。

???「とりあえず腹ごしらえね。」

そう言って彼女は街中を歩いていく。すると周りの人は何やらこっちを見てザワザワし始めた……

「お…おいアレ！」
「何でここに！？」
「キレ～イ！」

聞こえてくる声……
しかし彼女は慣れている様で特に気にすることなく歩き続ける。すると、

???「……あ♪」

何かを見つけたらしい。満面の笑みで駆け寄る。

???「すみませ～ん！」
オヤジ「いらっしゃい！何にします？」
???「えっとじゃあ……コレとコレとコレとコレ……とコレ下さい♪」
オヤジ「おお～、お客さんよくばりだねぇ！毎度ありっ！」
???「フフッ。これだけは譲れないの。」

そう言って支払いを済まし、笑顔で去っていく……後ろから「また来てね～」という声が聞こえる。

???「うん！美味しい♪」

両手のアイスクリームを嬉しそうにほおばりながら彼女は言う。
その姿は結構なインパクトであろう。街中の人もポカンとした顔で見ている。

???「……久々に来たけど、やっぱり良いところねヤマブキシティ。」

サラ……
夜風が彼女の美しいクリーム色の髪と黒いドレスを静かになびかせた。

そしてそのまま、街のネオンの光の中に消えていった……
……

ヤマブキシティ・ホテル

カスミ「サトシぃ～。さっきオーキド博士から電話来てたわよ。」
サトシ「博士から？」

風呂上がりらしきカスミがジュースを飲みながら言う。

カスミ「後で研究所に連絡くれだってさ。」
サトシ「ふぅん。何だろうな。」

とにかくかけてみよう。
タケシ、カスミと共にロビーにあるＴＶ電話へ向かう。

サトシ「こんばんは博士。サトシです。」
オーキド「おおサトシか。夜遅くにすまんのう。」
サトシ「いえ。それで博士。俺に何か用ですか？」
オーキド「ふむ。では手短に話すぞ。先日ポケモンリーグから連絡があっての。何でも近々、大規模なバトル大会が開催されるようなんじゃ。」
タケシ「バトル大会？」

オーキド「ふむ。全国から選りすぐりの使い手達が選ばれ行われるという事なんじゃが、サトシ、お前もこれにカントー代表として選ばれたそうじゃ。」
サトシ「え！？俺が！？」
タケシ「やったなサトシ！」
カスミ「博士！アタシはアタシは！？」
オーキド「残念じゃが、これは一般のみ対象の大会の様でな、ジムリーダーの参加は受け付けてないらしいのじゃ。」
カスミ「ええ～そうなんですかぁ～……。」
タケシ「まぁカスミ。俺達は今回は見守る側に徹しようじゃないか。これも立派なジムリーダーの仕事だよ。」
カスミ「はぁ…。それもそうね。」
サトシ「それで博士！他のメンバーとかは解りますか！？」
オーキド「そうじゃの……。お前が知っとる者の中では、カントーではヒロシ。それとシゲルも選ばれていたそうじゃが、辞退したそうじゃ。」
サトシ「えっ！何でですか！？」
オーキド「アイツが言うには、「今は研究に集中したい」とのことじゃ。」

研究か……。
アイツにも本気でうちこめる事が見つかったんだよな……
バトルできないのは残念だけど……そういう事なら俺も邪魔できない。

オーキド「まぁそう肩を落とすなサトシ。変わりと言ってはなんじゃが、他にも手強いお前のライバル達がたくさん選ばれとるぞ？」

途端にサトシの顔が明るくなる。

サトシ「例えば！？」
オーキド「ホウエンではハヅキ、テツヤ、コーディネーターだがシュウ、それにお前の昔の仲間でもあるハルカも選ばれておるぞ？」
え……ハルカ？
今アイツ確か……音信不通なんだよな……？
この大会の事は知っているのだろうか？
タケシとカスミも難しい顔をしている……
オーキド「うん？どうかしたかの？」
サトシはオーキドにハルカが音信不通状態であることを一通り説明した。
オーキド「ほぉ～。それはまた熱が入っておるのぉ。」
タケシ「はい……。しかし連絡が取れない状態なので、ハルカがこの大会の事知ってるかどうか……」
オーキド「ふぅむ……。ジョーイさんに伝言を頼めば、ハルカがどこかのポケモンセンターに寄った時にでも伝えてくれるじゃろう。まぁそういうトレーナーやコーディネーターも沢山おるから、そんなに心配しなくても大丈夫じゃよ。」
そうなんだ……いっぱいいるんだ……
オーキド「そういう事なら、わしからジョーイさんに頼んでおこう。」
サトシ「ありがとうございます博士！それで、他にはどんなメンバーが？」
オーキド「そうじゃな……。シンオウからはシンジが出てきておるぞ？」

シンジ……来ると思ってたぜ……！

オーキド「他にはジュン、ヒカリ、ノゾミもおるな。」
カスミ「何だか昔の仲間が勢揃いって感じね。ああ～やっぱりアタシも出たかった～！」
オーキド「とにかくサトシ、わしはお前が優秀なトレーナーとして選ばれた事を嬉しく思うぞ。この大会は出場するだけで、全国に名を知らしめる事ができるチャンスでもあるからの。」
サトシ「ありがとうございます博士！うおおおおお！！燃えてきたぜえええええ！！」
カスミ「うるさいっての！」

サトシが両手を上げて叫ぶ。
その時ロビーにいた他の宿泊客数人が振り向いた……

タケシ「俺達の分も頑張れよサトシ。」
カスミ「そうよ。恥ずかしい負け方したら許さないからね。」
サトシ「わかってるって！な、ピカチュウ？」
ピカチュウ「ピッピカチュウ！」
オーキド「サトシは相変わらずじゃのぉ。わしの用件は以上じゃ。詳しい日程などが解ったらまた連絡する。ではサトシ。頑張るのじゃぞ？」
サトシ「はい博士！必ず優勝してみせます！！」

ピッ……電源を切る。

サトシ「おおおおおおし！こうしちゃいられないぜ！！今すぐ特訓だ！！」

そう言っていつかの時のように外に駆けていこうとするサトシ……
……が、

カスミ「流石にもう止めといた方が良いんじゃない？」

カスミがロビーの時計を指差す。見ればもう午後１１時を回ろうとしている。

タケシ「あまり根を詰めすぎてもポケモン達に負担をかけるだけだぞ？」
サトシ「う～ん……そうだな。じゃあもう寝る！！タケシ！明日は６時に起こしてくれ！」
カスミ「自分で起きなさいよ……」
タケシ「お前起こすのにいつも１０分くらい掛かるんだよな……」
カスミ「いざとなったらアタシを呼んでタケシ。水ポケモンで冷水ぶっかけて風邪ひかせてやるから。」
サトシ「いいです自分で起きます……。」

コイツの発想はいちいち怖いんだよなまったく……
三人はそれぞれの部屋へと戻っていった……

ピピガガッ……

ロケット団員「準備はいいな？」

物陰から響く声……

違う場所で待機する部下に通信機器で確認しているようだ。

ロケット団員「はっ。いつでも。」

ロケット団員「よし。今回の我々の目標はマサラタウンのサトシの捕獲だが、作戦中に異常が発生した場合でも決して深追いはするな。我々が目立ってしまってはロケット団全体が動きにくくなる。」

ロケット団員「はっ。」

ロケット団員「では行くぞ。」

ザザザザ……

団員達が一斉に動き出す。

そんな事には構わず、大都市ヤマブキシティは相も変わらず騒ぎ立てていた……

同時刻。

コンコン……ドアをノックする音。

サトシ「ん？」

寝ているピカチュウとタケシを起こさない様そっとドアの方へ向かう。

ガチャ……

サトシ「……カスミ？何だよこんな時間に？」

ドアの前には私服姿のカスミが立っていた。

カスミ「ちょっと……顔貸してくんない？あ、タケシには内緒だよ……？」

サトシ「え……？ま、まぁ良いけど……」

カスミは珍しく頬を赤くさせ、何か恥ずかしそうな顔をしている……ってか、タケシには内緒って……ふ、二人きりってこと？しかもその顔……

サトシ（いや……まさかな……。）

さんざん子供だ鈍感だと言われてきたサトシでも流石にドギマギしたらしい……同時に彼の顔も何だか熱くなっていく……

二人は大して喋ることなく、ホテルのロビーを出て行った……

……

わからない強さ

サトシ「な、なぁ……どこまで行くんだ？」
カスミ「いいから付いて来て……」

サトシはカスミに言われるがままヤマブキシティのネオン街を歩いていた。
流石は大都市。時間も結構遅いはずだが、まだまだ眠らないと言った感じだ。

サトシ「にしても……」

サトシはチラッと自分の右手を見る。そこにはカスミの手が。
状況を説明すると、サトシは今カスミに手を掴まれ、引っ張られる様にして歩いている。
女の子と手を繋ぐなんてことは、サトシの経験上めったに無かったため、どうも落ち着かない。
……二人きりになるのは今まで何度もあったんだけど……
１０歳の頃旅してた時なんてしょっちゅうだった。だからそんなに気にすることはない……はずなのに……
なのに……何か今は違う……？違うって……何が違うんだ……？
などと考えていると、突然カスミの足が止まった。
どうやら考え事をしている間に目的地に到着したらしい。

カスミ「……着いたわ。」
サトシ「着いたって……ここどこ？」

ちょっとだけ顔が赤いサトシは辺りを見渡す。

少しだけ薄暗い。どうやら街中の裏路地のようだ。人々の騒ぎ立てる声がかすかに聞こえてくる。

カスミ「……」

カスミは黙っている。手はもう繋がれていない。

サトシ「……な、なぁ、明日早いんだし……用があるならさっさと言ってくれよ。」

サトシはこの空気に耐えられず、前にいるカスミに言う。

内心、サトシの心臓はバクバクだった……何だよ！？何でこんな緊張してんだよ俺！？

カスミ「サトシはさ……」

不意にカスミが口を開く。

カスミ「サトシは……ヒカリの事……どう思ってるの？」

サトシ「へ？ヒ……ヒカリ？」

検討違い（？）のカスミの発言に思わず間抜けな声が出た。

何で！？何でそんなこと聞くんだ！？

サトシ「ど、どうって……ヒカリは前に一緒に旅した仲間だし……大切な友達だけど……」

カスミ「ホント……？」

サトシ「ほ、ホントだよ。そんなの当たり前だろ？」

カスミ「そう……。」

カスミは背を向けたままで、その顔は見えない。
何だよ……何が言いたいんだよカスミは……。
ヒカリは大切な友達……そんなの当たり前だ。
じゃあハルカは？
ハルカも……って！何でハルカが出てくんだよ！？今はヒカリの話だろうが！
ああ～もうっ！じれってぇ！

サトシ「おいカスミ！お前結局何が言いたいん……」
カスミ「じゃあ……そのヒカリのためなら、何だってできる？」

カスミがサトシの言葉を遮り言う。

サトシ「はぁ？な、何だってって……それに寄る……かも……。」
カスミ「ヒカリは大切な友達なんでしょ？」

カスミの必用な追求にサトシはもう半分やっけになり……

サトシ「っっっ！だあああもうっ！めんどくせぇ！ああできるとも！！何だってやってやるさ！！友達だからな！！」
カスミ「そう……。わかったわ。」

カスミは静かにそう呟き、クルッと振り返ってサトシの方へ歩き出した。
その顔は……どこか安心した様なものだった。

サトシ「？お、おいカスミ……？」

カスミはその声にも対して反応せず、そのままサトシの横を通り過

ぎた。そして、
ピタリと、彼女の足が止まる。
カスミ「……その言葉……嘘じゃないわね？」
サトシ「は？」

その瞬間、
バッ！！と、
突然カスミの周りに、黒い特殊スーツ（？）を着た男数人が現れた。
サトシ「え！？な……何だ！？」
状況がつかめず困惑するサトシ。
無理もない。なにせ、今まで自分とカスミ以外に人がいた気配は全くなかったのだから。
サトシ「……こ、これって何かのドッキリ？」
思わずカスミに聞いてしまう。
カスミ「ドッキリ……まぁ似たようなモンかもね……。」
カスミの顔は笑っている……が、何と言うか……怪しい笑みだった。
カスミ「じゃ、タネ明かししましょうかね。」
バッ！と、カスミが服をひるがえす。
そして……そこに立っていたのは……

ロケット団員「我々はロケット団！マサラタウンのサトシ！一緒に来てもらうわよ？」
サトシ「なっ……ロケット団だって！？ってかカスミは！？」
カスミがいたその場所には、周りの男達同様特殊スーツに身を包んだ、謎の女が立っていた。
サトシはもう何がなにやら解らない。

団員「フフッ。まだわからない？さっきまでのあなたの友達カスミは私の変装。本物の彼女はヤマブキシティのホテルで寝息を立てているわ。」
サトシ「う……嘘だろ……！？」

さっきのが変装だって！？それにしたって出来過ぎてるだろ……！
姿形はもちろん、声やその雰囲気まで瓜二つだった……いや、
それより……ロケット団って……！
「ロケット団」。カントー、ジョウト地方を中心に活動している悪の秘密結社……と言えばしっくりくるだろうか？
色々と裏で悪事を働いているろくでもない奴らだが、最近は影を潜めていたはず……
そんな奴らが……俺を狙ってる？

サトシ「い、一体俺に何の用だ！！」
団員「だからさっき言ったでしょう？私達と一緒に来てもらうって。」
サトシ「だからそれが何でだって聞いてんだよ！！」
団員「さぁ？私も詳しくは知らないわ。でもボスが直々に……」

女団員はまだ何か言おうとしていたが、
スッと、それを遮って団員の一人がサトシの前に出てきた。

団員「答える必要はない。マサラタウンのサトシ。とにかく我々と共に来てもらう。」
サトシ「……へっ！俺がそう簡単に従うと思うか？行くぞピカチュ……」

そこでサトシは気が付いた。
そうだ……！ピカチュウつれてきてないんだった……！
ピカチュウだけではない。他の手持ち達もポケモンセンターに預けたままだ。
明日引き取ろうと思ってそのままホテルに行っちゃったんだっけ……
だが、後悔先に立たず。どうしようもない。

団員「ポケモンがいない貴様など只のガキだ。大人しく付いて来てもらおう。」
サトシ「ぐっ……！っのヤロォ……！？」

団員に殴りかかろうとするサトシ……が、突然その足が止まる。
信じられない光景が視界に入ったからだ。

サトシ「ヒ……ヒカリ！？」

団員の一人が手持ちであろうオドシシにヒカリを乗せ、こちらを見て笑っていた。
ヒカリは目を閉じたままピクリとも動かない。

団員「あまり騒いでもらっては困るからな。少し手荒な手段を取らせてもらった。抵抗するなら……」

ボン！と、団員がストライクをボールから繰り出した。
そしてストライクはゆっくりと、ヒカリの首筋にそのカマを突きつけた。

サトシ「なっ……！！やめろ！！ヒカリは関係ないだろ！？」
団員「お前が大人しく従うなら……この女は放してやる。わかるな？もう選択肢は無いぞ。」
団員「大切なお友達のためなら何でもできるんでしょう？」

先ほどカスミに化けていた女団員がからかう様に言う。

サトシ「……！！」

何も……できない。
俺は……ポケモンがいないと何もできないのかよ……！？
目の前には数人の団員。しかもここは裏路地。
少し異変が起きたところで、眠らないこの街の活気にそれはかき消されてしまう。
眩しすぎるネオンの光は、同時にいくつもの影を作り出していた。
ドン……サトシの背中が壁に当たる。無意識に後ずさりしていたのだろう。
このままじゃヒカリが危ない……

サトシ（……もう……行くしか……）

サトシが口を開きかける……その時だった！

？？？「何をしているのかしら？」

不意に、声が聞こえた。
女の……声？

団員達「！貴様は……！」

声が聞こえた方……すなわち路地の入り口へ目を向ける。そこには……

サトシ「シ……シロナさん！？」

後ろから射すネオンの光のせいで顔はよく見えない……が、見間違う筈がない。
クリーム色の美しい長髪に黒いドレス……
両手にはアイスクリーム……は、もう無いが。
そこに堂々と立つのはまさしく、かのシンオウ最強のトレーナー、シロナだった。

団員「チャンピオンが何故ここに……！？」
シロナ「たまたま通りかかっただけよ。それよりそこにいる子達、私の知り合いなんだけれど……用があるなら私を通してもらえるかしら？」

淡々とシロナが言う。
凄まじいオーラをその身に纏わせながら……

サトシ「……」

もはやサトシは今の状況に圧倒され声も出せない。
普段のシロナは気さくでとても親しみやすい。そして、いざポケモンバトルとなるといつでも凛としていて、王者の貫禄をかもし出す。

だが……今のシロナは……前者でも後者でもない。
目の前の人物を「相手」ではなく、「敵」と認識している。
まるで……牙を剥き出しにする獣の様。
ゴク……サトシが息をのむ……
こんなシロナさん……見たことない……！

団員「……」

団員達は黙っている。
ギン……と、両者の視線が交差する……

団員「……さすがにチャンピオン殿が相手では分が悪い。」

団員がストライクをボールに戻す。

シロナ「……ずいぶんと諦めが良いのね。」
団員「フッ……。諦めてはいない。通る道を変えただけだ。」
シロナ「……」

団員は不敵な笑みを浮かべている……
そして、黙りこくっているサトシを見た。

団員「……」
サトシ「……！」

何も言わない……ただ、何か探る様な目でサトシを見ている……
……その瞬間、
ボシュウッ！！と、
突然、辺りを黒い煙が包んだ。

サトシ「うっ……！？」
シロナ「えんまく……！」
徐々にえんまくが晴れていく……だがそこには、既に団員達の姿は無かった……
シロナ「逃げられたわね……」
しばらく唖然とするサトシ……が、
サトシ「ヒカリ！！」
サトシが倒れているヒカリに気が付き、駆け寄る。
シロナ「……どうやら気絶しているだけの様だけど、念のため病院へ運びましょう。」
サトシ「はい……。」
シロナ「サトシ君は大丈夫？」
サトシ「……俺は大丈夫です。でも何でシロナさんが……」
シロナ「その話は後で。とにかく今はヒカリちゃんを。」
サトシ「そうですね……。」
とりあえずは助かった……だがサトシの顔は当然ながら冴えない。
俺の……せいで……
ロケット団は自分を狙ってきた。
だが、その魔の手は自分だけでなく、仲間にまで及んだ……
恐らくは……これで終わりではないだろう……
今回はヒカリも事なきを得たが……もしまた誰かがさらわれたら……

俺のせいで……仲間が危険な目に……
それに……

サトシ（……俺は……また何もできなかった……。）

サトシはいつかのタマムシ美術館強盗事件を思い出した。
あの時も結局……何もできぬまま犯人に逃げられた……
そして……アイツ……
サトシの脳裏には、タマムシ美術館で会った漆黒の人物の姿が浮かぶ。
ただ睨まれただけ……なのに……何もできなくなってしまった……
そして今回も俺は……ただ圧倒されたまま……

サトシ（俺のせいで仲間が危険にさらされる……なのに俺は……何もできてない……）

強くなれば良いのか？あのワタルさんにも勝てるくらいに……
でも……何か違う気がする。
そういうのではない……もっと違う決定的な差を……彼等からは感じた。

サトシ（……俺は……どうすれば……。）

ヤマブキシティの街は何事も無かったかの様に相変わらず騒ぎ立てている……
サトシは病院へと急いだ。どうしようもない無力感を抱えながら……
……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6645z/

ポケモンヒストリー

2012年1月3日00時50分発行